

想いを込めて

大きな楠の古木が囲炉裏で燻ぶっています。シュンシュンと鉄瓶のお湯も沸いています。おじいちゃんギセルでポンと火種を手のひらに移しながら話をします。「まあ、なんじゃわい、何と言つてもケカツが恐いわい。その時、これが役に立つのじゃ」子供達に焼米を湯で戻しながら少しお砂糖も入れて手渡します。「ケカツ」って何だろう。その疑問は古典を習う時にやっとわかります。「飢渴、けかつ。」かつて人々は自然を敬い、自然を恐れ、自然の中で生きるすべを学びました。それが焼米です。このふるさとの味を今に甦らせる事は出来ないか。本校商業科では2年前から取り組みました。そして「想、W i s h」と命名した焼米チョコが出来たのです。太陽の匂いがするなつかしい味がここに帰ってきました。山都町で田植から稲刈りまで、無農薬で育てたお米、それを素材にしたお菓子、卒業の日、2年生の想いを込めた贈り物に3年生は囲炉裏を囲んだ子供達のように目を輝かせていました。

平成二十二年三月十二日

国府はがき通信

No190

蕾 滝 いく子

寒空にむけてふくらみかけては
きびしい風に また身をひきしめ
ほんとうの春の陽射しを待ちわびる

幸福の蕾

まだ青く固いのですね
力いっぱい ためしのりこえ
光の束をつかみとりたいあなた
生命いっぱい めざす道を駆け
生きていく喜びを告げたいあなた
その胸の奥に春を待つ蕾

ええ 風はやがて暖かくなりますとも！
心にこんなに太陽が輝いているのですもの

あなたへ

卒業です

「あのね、あのね、おかあさん、おかあさん」
と追いかけて話かけてた娘も、「ボク、バク
テンが出来るんだ」と転がった男の子も、
ニキビができ、髪を風に流して、恋の歌など
を覚え、高校卒業です。あなたの腕は、父や
母も抱えることもできます。目は未来を見つ
めることもできます。耳はたくさんの言葉や
音楽を聞くことができます。口にはやさしい
心を伝えることができます。どうか、いつま
でも太陽の匂いがする若者でいてください。

本校卒業生進路 県立大等進学七十%、労金等就職三十%

平成二十二年三月五日

国府はがき通信

卒業の前に

「自転車の前かごに、スポーツバッグと教科書を入れて、風に向って走ってた。学校へと続いていくこの道は、雨の日があったり、風の日があったり、ときどき雪の日もあった。今日で終るこの道、ボクの自転車、前かごに入れるものは、明日から何だろう」今日は三年生の登校日です。髪型も制服も、もう大人の雰囲気です。デジタルカメラを持ってひとりの生徒が校内を歩いています。「何してるの」「思い出を全部残しておきたいのです」。そこには教室、体育館、トレーニングセンター、セミナーハウス、寮、歴代の記録が刻まれている青春の譜、卒業を目の前にして亡くなった水上大貴君の桜、校庭のかたすみに小さく咲いているタンポポなどが写っています。「もう進路は決まったの」「まだです。大学受験します。」彼の自転車の前かごには今は、何も入ってはいないけれど、進む道はしっかりと決まっています。

本校の卒業式、三月一日（月）午前十時

平成二十二年二月二十六日

国府はがき通信

No188

お雛さま

先日、人吉の地を訪れました。桃色の小さなのぼりが霧の中に浮かび上ります。今、「おひな祭り」一色です。家々には雛が飾られ、お店には緋毛氈をかけた豪華なものが並べられています。お祭りの華やかさの中に、どこかしんみりとした風が流れています。人吉が小京都と言われる所以でしょう。雛祭りの原点は三月三日に、水辺で災厄をはらう中国の風習から伝わったものだとされています。日本では源氏物語に「薫」の歌として出ています。「見し人の形代かたしろならば身にそへて恋しき瀬々のなで物にせむ」身をなでて、罪、けがれなどを移して流す人形は、女の子の玩具として日常的になっていきました。立派な雛になったのは室町時代、庶民に広まったのは江戸時代、流し雛の風習は、地方にまだ残っています。人吉の「おひな祭り」も紙で作った雛を川に流す行事があるのでし
ようか。本校にも大きな美しい雛が玄関に飾られました。各部屋の入口にはちいさなちいさなお雛さま。春の陽がゆつくりと移っています。

平成二十二年二月十九日

国府はがき通信

No187

心は燃えている

「何かをやるう、みんなで喜ぶものを。鳥肌が立つほどわくわくするものを。頭の中でイライラ、キリキリしていたら、生徒の声など聞こえはしない。何かをやるう。」仲間がその何かに惹かれ、イメージを膨らませ、みんなで一つのものへともっていく。そうした集まりがここにあった。松竹梅の絵をあしらった大きな活字が目飛び込んでくる。熊本国府高校新年会のお知らせだ。カッツは、徳利と杯を持った若者がイェーイと両手をあげている。「もう参加しなくちゃ、人生は始まらない。」そんな浮き浮きした気分になる。当日、大きな蝶ネクタイをでかでかにつけて、ふたりの司会者が言葉巧みに会を進めていく。大きなテレビ画面を使つてのクイズ、学校のあらゆる面を捉えた問題、笑いと拍手、あつと言つ間に時間は過ぎる。熊本国府高校の職員は心を失わない。どんな時代になつても心はふつふつと熱く燃えている。文明を手に入れてさらに躍進だ。

平成二十二年二月十二日

国府はがき通信

No186

命のパズル

「先生、こんな嬉しいものを写してきましたよ。」ある先生から携帯の写真を見せられました。そこには小さな可愛いお地蔵さまが写っています。「国府高校に合格しますように」という願いのエプロンが掛けてあります。知る人ぞ知る有名なお地蔵さまだそうです。じーんと胸に染み込むものがあります。その中学生の心、そしてそれを大事に写してこられる先生、人生の中でカチッと命のパズルがはまる瞬間があります。何でもないようですが、ああ、あの時がそうだったと思うものです。その願掛けの写真を見た時、そんな思いがしました。願掛けまでしてくれる中学生がいる。私もはその期待に応える高校にしなければならぬ。ひとりひとりの生徒の胸に、国府高校での日々が深く刻み込まれる学校にしなければならぬ。カチッと命のパズルが鳴りました。「手をあげるひとのために。声をあげるひとのために。歩きだすひとのために。目のまえのひとのために。今、光る時間のまんなかで、思いをつくして。」

平成二十二年二月五日

国府はがき通信

No185

この声、この涙

「挑戦、機略縦横、平常心」底冷えのする県立総合体育館に各学校の垂れ幕が下がっています。九州選抜ハンド県予選決勝リーグの会場。立ち上がりメガホンで叫ぶ応援団。得点のたびに沸き上がる歓声、鋭く響くホイッスル、目まぐるしく変わる攻守、手をたたき踊り上がる監督、本校男子ハンド部は前日2勝し、ほぼ優勝を手にしていましたが、今日は九州学院と対戦、前半は12対12、後半は11対10、タイムアップ寸前の決定的なシュートを外して1点差で負け。しかし、得失点差で優勝しました。実に9年ぶりの優勝です。会場には野球部、ソフト部、バレー部も駆け付け、他校を圧倒していました。国府高校で出会った仲間、頑張る友達を必死に応援する若者、この声、この笑顔、この涙が明日の国府高校を育てるのです。無垢なまでに何かを追い求める姿、青春には青春として生きる何かがあります。体育館を出ると外は冬、すっかり落葉した木々の中に、次の若々しい芽を見た思いでした。

平成二十二年一月二十九日

国府はがき通信

No184

愛する人のために

両手を必死に握り締めて、応援しているおばあちゃん
がいます。新人戦、サッカー会場です。試合が終って孫が駆けつけます。「ばあちゃん、寒かつたろう、オレも頑張ったけんね。」人は自分のために頑張るだけでは限界があります。愛する人のために頑張ることが出来た時、人ははじめて、偉大な事が成し遂げられるのではないのでしょうか。また、感謝の心を持ってベストを尽せば驚くほど潜在能力を發揮できます。この生徒も小さい身体をぶつけて走り回っていました。一月二十六日は本校専願特待入試です。昨年以上の受験生が受けてくれます。どうか受験生は、今まで育てていただいた方々、自分を愛してくれた方々、そんな人のことを思って挑戦してもらいたいものです。本校でもなるべく多くの人の希望を叶えたい、そして育てたいと思っています。若者は未来に生きる人です。私どもも、未来を捉えた先見性を大事にします。知識、技能だけでなく、心の面での教育に取り組みます。

平成二十二年一月二十二日

国府はがき通信

No183

心を鏡に

一月四日、早朝、出水神社で野球部の必勝祈願、若者は遅く爽やかに成長しています。清澄な空気の中、今年一年の無事と甲子園出場を願いました。その後、三千段の石段登り。私は奥阿蘇に足を伸ばしました。夕暮れの高森峠から見る景色はまるで東山魁夷の世界。山並みが幾重にも重なり冬枯れの山肌は、折からの夕陽に彩られて茶褐色に、明るい部分は淡い赤色に、暗く影になったところは濃い紫にと色の変化を見せています。そして、その向こうには冬の月。東山魁夷は美校時代から結城素明に師事しました。そのおおらかで自由な雰囲気にはひかれたからでした。「心を鏡にして自然をよく見るように」。「平凡なものを緻密に見ると、非凡な発見がある」。悩んでいる魁夷に師がさとした言葉です。私どもも、「平凡なものに非凡なものを見つめる」「目を養いたい。そのために心を鏡にして物事を見たい。生徒のひとりひとりに必ず非凡なものがあると確信しているのです。

平成二十二年一月十五日

国府はがき通信

No182

私どもは問い続けます

熊本国府高校は、毎朝あなたが気持ちよく、向かうことのできる高校ですか。学ぶことを生き生きと楽しめる場所ですか。ほっと安らげる、好きなスペースはありますか、そこから見える風景に、どんな明日を描きますか。私どもは応えます。

若者が人生の大切な時間を過ごす場所。

その場所が、豊かさと潤いに満ちあふれるために、

私どもは、具体的な形で応えます。

生徒を想うこと、それが私どもの出発点。

新年おめでとうございます。今年もその出発点に立って、未来への旅立ちを続けます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

平成二十二年元旦

国府はがき通信

No181

春、夢を持って

「春、夢をもつて。夏、燃えて。秋、自分を見つめて。冬、耐えて。生きる。」冬は準備の季節です。耐える時間です。準備とか、耐えるとか、ふだんは隠れて、見えない行為です。準備するということ、耐えるということは、目的を持たなければとてもやっていけるものではありません。毎日毎日平凡な事の積み重ね。ほとんど残らないけれど気高い行為。この行為を耐えることですか、次の段階は開かれませんか。今、渡り廊下に二年生の修学旅行の写真が張り出されています。北海道札幌、小樽、スキー研修。廊下いっぱいには若者の生き生きとした姿が広がります。新型インフルエンザが猛威を振るう中で、全員、元気に旅を楽しんで帰ってきました。これは先生方、生徒の徹底した予防対策によるものでした。マスク、手洗い、うがい、修学旅行を成功させようという目標に向かつて準備をしたからです。いよいよ受験シーズン。春、夢をもった若者が本校で熱く燃えることを願って、私どもは準備にとりかかります。

平成二十一年十二月二十五日

国府はがき通信

No180

ゴルフ

男子ゴルフで、十八歳の石川遼選手が史上最年少の賞金王に輝いた。「ハニカミ王子」というニックネームがもはや似つかわしくないほど逞しく成長し、風格さえ感じられる。こんな素直な爽やかな若者が育つのは、ゴルフというスポーツによるものであるだろうか。ゴルフには審判員がない。自己申告によってペナルティも科せられる。それだけに自らを律し、マナーを重んじる心が育つ。考えてみれば教育の場に一番ふさわしいスポーツだと言える。2016年、リオデジャネイロ五輪で正式種目になった。今後、教育界でも見直されるにちがいない。すでに野球からゴルフに方向転換した高校も出てきた。熊本はゴルフの名選手を輩出する県として有名。それは教え、ひたすら学ぶ土台があるからである。本校もプロを目指している2名の生徒がいる。緑のグリーンから白いボールが未来に向かって飛んでいく。本校の新たな挑戦も続く。「純白の羽をひらきて大空に翔び立つまでを学べひたすら」安永蒨子

平成二十一年十二月十八日

国府はがき通信

No179

期末考査

カタツ、カタツと印刷機が動く。次から次へと飛び出てくる試験問題。あっという間に印刷は終る。ガリ版を切って夜遅くまで印刷していたのもう昔のこと。テクノロジーはいろいろな分野で発展を続けている。先日テレビを見て驚いた。手術もロボットがする時代が目の前。お医者さまは画面を見ながら操作するだけでいい。「あなたのこの手術はこのロボットが行います。安心してください。」なんて言われたら、「やめてエー。」と叫びたくなる。人は成人した後に出てきた新たなテクノロジーに違和感を抱く存在という。そしたら、私などは違和感だらけの人生だ。だが、どんなにテクノロジーが発展しても、動かすのは人である。人は自然の産物、自然の中の、人としての感覚はどんな時代にも失いたくない。期末考査が終ると先生も生徒も解放される。北海道の雪を楽しむ修学旅行の話。先生方は教職員ハンドの練習、それを応援する生徒、笑い声が校内にある。十二月四日、期末考査は終った。

平成二十一年十二月十一日

国府はがき通信

No178

芸術の風

秋風が校内を吹き抜ける放課後、暗くなった中庭で何か変なものを作っている一団がいる。「これが倒れる、そして一気に立て直し、もとの姿にする。難しいなあー。」釘を打っては取り外し、また作っている。「何をしているのですか」そう尋ねると「ニヤツとして、」今度、演劇コンクールに出す舞台装置です。益田監督が無理な要求ばかりするのですよ。」と実に楽しそうに話す谷口先生。若い先生と生徒を前面に出して、自分は裏方に徹する姿は神々しい。苦勞を知った以上、演劇を見ないわけにはいかない。この日、11月21日は国府高校市場のオーブニングの日、そしてサッカー部が天津と対戦する日。朝10時、国府市場に駆け付け、生徒の巧みな口上に感心しながら、沢山の品物を買ひ、演劇会場へ。現代版かぐや姫と日蝕を取り入れた創作劇、県で堂々の三位。そのレベルの高さに感動。先日の校内合唱コンクールも大成功。秋風と共に、本校にもいよいよ芸術の風が吹き始めた。

平成二十一年十二月四日

国府はがき通信

No177

念じて、念じて、念じ切って、やっと花が開いた人がいます。九州一周駅伝、岩見和明選手（平成 17 年卒）大会 2 回目の出場で初の区間賞獲得。もう一人はハンドボール女子リーグで史上 3 人目となる通算 100 本目の 7メートルスロー阻止を達成した堂面（旧姓高森）妙子さん（平成 10 年卒）。「どんな苦しい時でも、あきらめようとする自分はいなかったし、あきらめる自分もいなかった」二人の共通した言葉です。自分がどんな状態であろうと、まわりがどんな環境であろうとモチベーションを維持していく。それは簡単には出来ない事です。今年、本校はほとんどの部があと一歩で、全国大会出場を果たすことができませんでした。こんな時こそ、自分なりに工夫し、意欲をかきたてて、来年の準備に入りたいものです。二人の先輩を追いかけねばなりません。この冬は勝利へのスタートの冬。念じて、汗を流す冬。午後四時、どの部も、木枯らしが吹き始めたグラウンドに飛び出して行きました。

平成二十一年十一月二十七日

国府はがき通信

No176

サッカー

「今からサッカーの時代、熊本県にサッカーの強豪校を創りたい」
「サッカーですか、熊本県には馴染みませんよ。日本、特に熊本はスポーツに道を求めます。剣道、柔道、野球道……。サッカー道なんて聞いた事がありません。また、あのマナーの悪さが嫌な人が多いんです。金絲猴みたいな髪。若いのにわざわざ白毛にしている人までいます。」「そんなこと言ったら時代に取り残されるよ。人間の本能は走ることで蹴ること、小さな子供を見てごらん、いつも走って、何か蹴っているから。日本もサッカーの時代にすぐなるよ。」「今から30年前荒木時彌先生とこんな話をした事がある。その後先生は大津高校長になられ、サッカー部を名門校に育てあげた。大津町長になられると立派なサッカー場を設置、そしてロアツソの創立に尽力、偉大な指導者の業績に、ただただ頭の下がる思い。そのサッカー場で十一月二十一日、本校は大津高校とベスト2をかけて戦う。大津高校はまだ坊主頭だろうか。」

平成二十一年十一月十八日

国府はがき通信

No175

記憶

先生が何かの拍子にふと口にした言葉は記憶のはしに引つ掛つて、なかなか消えないものです。「私は山に登る時にいつもポケットにコスモスの種を入れておきます。もし私が遭難したら次の年、そこにコスモスの花が咲いているでしょう。」ゴリラみたいなその先生の言葉は、思ってもみない瞬間に今でもよみがえります。ふと口にした言葉だけでもこんなに残るのですから、まして自分のために応援してくれた記憶は、強烈に残るのではないのでしょうか。十一月七日(土) 第60回全国高校駅伝大会熊本県予選大会、一年・二年が主力の本校は四位、多くの先生方が応援していました。「ガンバレ」必死に叫ぶその声に生徒も目をギラギラさせて応えます。人生は増え続けるページ、胸に深く刻み込まれる出来事を真白なページに記していく。応援する人も、応援される人も、今日のこの風を、今日のこの日ざしを生き生きと思い出させるにちがいません。

平成二十一年十一月十三日

国府はがき通信

No174

何も見えない

「海のほか何も見えないときに、陸地がないと考えるのは、決してすぐれた探険家ではない」フランミス・ベーコン。愕然とします。平成二十二年三月卒、求人状況、熊本県は0.2倍、なんと全国の下位から2番目。海は荒波、陸地どころか、何も見えません。こんな時どう生徒諸君を励ませばいいのでしょうか。生徒は生徒で、どっぴりと弛緩した世界につかっています。「楽をして給料の高い所はないかしら」なんて、いつも考えているのです。「君が会社の社長ならどんな人を雇うかな」、そう言って求人状況の表を見せると実に悲しそうな顔をします。その時、初めて気がつくのです。当たり前前に学校に来て、勉強し仲間と語らい、部活に汗を流す。そんな毎日がいかに大切であるかということ。しかし熊本県も全国平均ぐらいの求人があつて欲しいものです。献血、日本一、国体は常に上位の熊本県です。人の心はあたたかです。努力もするのです。せめて遠くに陸地が見える海でありたいのです。

平成二十一年十一月六日

国府はがき通信

No173

避難訓練

「私たちが十七歳の頃、防空頭巾にモンペ、住所氏名、血液型を縫い付けていたの。手足が吹き飛ばされてもわかるようにね。避難訓練、それは見事でしたよ。一分もあれば全員、防空壕に飛び込んだのよ。焼夷弾が落ちた時に備えて、長い竹箒を持って学校を守ったこともあるの。口には歌とおしゃべり、髪は風と太陽のにおい。若い時はみんな同じ、平和な時代だから一層、災難に備えて欲しいわね。」八十四歳になる方が話してくれました。「避難訓練は生徒を完全に避難させる我々の訓練です。大切な生徒を預かっている我々には、その命を守る責務があるのです。そのために我々が日頃どうしななければならないか、その訓練とっていただきたい。」職員会議での校長の言葉。今、青空をあたり前のように見られる時代、空襲も焼夷弾もない時代。けれど生徒の命を守ることに、変わりはありません。十一月五日（木）の避難訓練を生きる力の場にする為に、私どもは取り組みます。

平成二十一年十月三十日

国府はがき通信

No172

夢

ボールにみんな集まっています。守備も攻撃もありません。お尻をもこもこさせて短い足で蹴っています。体育の日の幼児サッカー大会。一人前にユニフォームも着ています。ちゃんと「熊本」の県名も入っているのです。一度でいいから熊本という県を代表して試合をしたい。さらに日本代表になればどんなに素晴らしいだろう。それがスポーツをする人の夢です。今年の国体は新潟でありました。本校から三名の生徒が出場。砲丸投げ、七位入賞、松浦良美（一年玉南中）、ハンドボール女子、五位入賞、宮内優花（三年都呂々中）、林田千夏（三年松橋中）。それぞれ熊本県のために得点をあげてくれました。来年度からゴルフ部も発足します。熊本国府から日の丸をつけて、オリンピックに出場する選手が出るのも夢ではありません。2020年のオリンピックに長崎、広島が名乗りをあげました。お尻をもこもこさせてボールを蹴った子、そして熊本国府高校、その頃どんな姿を見せているでしょうか。

平成二十一年十月二十三日

国府はがき通信

No171

刈干切唄

「この山の刈干しゃーすんだあーよー あすは田んぼーで稲刈るかよー」。哀愁を帯びた唄が心に沁み渡ります。刈干し、昔は農家の大切な仕事でした。高さ二メートル近い茅の葉は細く長く、茎には白い生毛があります。秋には葉の脇に茶色の花が着きます。台風の際朝、風に倒れ、野分という古語がぴったりの風情です。「刈茅の共乱れして枯れ急ぐ」茅を刈って屋根をふく、高千穂、高森の人々の暮らしのひとつでした。人々は働きながら唄いました。その歌は白い秋の野に響く、切なく哀しいものです。その「正調刈干切唄」の全国大会で本校卒の瀬井真奈美さん親子がそろって栄冠を手にしました。高森津留出身の真奈美さんは高校時代から美しい声をしていたそうです。秋は終わろうとする年を愛しむ時、そしてまた、懐かしい人を想い出させる時、「先生、先生の車に秋がいっぱい。」見ると車の上に枯れ葉が舞い落ちています。秋をいっぱい乗せて帰りながら刈干切唄を歌っていました。

平成二十一年十月十六日

国府はがき通信

No170

人は文化という繭にくるまっ生きています。文明はその土壤の中から花を咲かせます。イスラムは砂、欧米は石、アジアは土。それぞれの民族はそれぞれの風土にのっとりた暮らしがあります。それが文化、それは人々の生きるかたちです。ちいさい世界ですが、学校も一つの文化を創り出します。本校には本校の文化があり、国府高校という土壤の中から文明の花を咲かせます。その発表の場が文化祭です。本校は泉心祭といえます。今年も十月二日に向けて、着々と準備が整っていました。水質汚染研究、エコカー展、薬物乱用根絶など、時代の流れをしっかりと捉えています。だがしかし、ここにきてどうしても勝てないものがありました。それは新型インフルエンザ。どこの学校も生徒が一同に集まると一気に広がっています。苦渋の判断、そして涙の結論、泉心祭の中止です。今はもう、新型インフルエンザから身を守る繭を生徒につくらせたい。そんな思いの十月です。

平成二十一年十月九日

国府はがき通信

No169

教育実習

「ハイツ」大きな声で手を挙げて答えている生徒がいます。教育実習生の授業です。一年生の頃は目立たない生徒だったのに、今は立派な高校三年生。教生を助けようとして、元気です。新たな挑戦を掲げて学校改革に取り組んでいる私どもですが、遅々として進まないことに、いらだちを感じる時もあります。しかし確かに生徒は成長しています。学校も活気が出ています。「小さなことを重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道だと感じています。」9年連続²⁰⁰ 本安打、大リーグ新記録、イチロー選手のこの言葉には大きな重みがあります。私どもの日々も小さなことの積み重ね。とんでもない素晴らしいところに行くことを信じて、今日もひとつひとつ重ねていきます。9月²⁸日4限目、三年四組で教育実習生の研究授業。「たった今生まれ、渦巻く光のなかで少しずつ、だが、確実に、鮮やかに変わっていくものがある。それを、瞬きもせず、凝視している眼がある」川崎洋

平成二十一年十月三日

国府はがき通信

No168